

[59] ギエムの三つの愛の物語

～強靱にして繊細～

2003年6月7日 東京新聞 夕刊

今から十年前、ギエムは「史上最強の美女」という異名を持っていた。美しいことも美しいが、その長く強靱な脚は、ほとんど武器を思わせる迫力を持っていた。

ギエムが登場する以前は、バレリーナは脚を垂直に上げることがなかったし、背中をしならせて、むしろ弱々しげな女性美を表現するのがふつうだった。そんななかギエムが上半身を微動だにさせず、不敵な笑みを浮かべて脚を真上に上げると、そのラインはシンポルタワーを思わせたし、水平に静止させれば、その爪先は銃口のように観客の心臓をねらい撃ちした。

だが、その後十年の動きで、彼女は強いつと同じほど繊細で、美しいと同じくらい頭のいい女性であることを証明した。衝撃的なテクニクとともに、いつか演劇的な心理表現を切り札として使うようになったのである。

そのギエムが自らプロデュースしたのが、いま上演中の「三つの愛の物語」と題する公演である。チエーホフの『三人姉妹』、メリメの『カルメン』、デュマ・フィスの『椿姫』と、世界的に名高い文学作品が原作のバレエをそれぞれ一幕にまとめ、

[59] ギエムの三つの愛の物語

～強靱にして繊細～

2003年6月7日 東京新聞 夕刊

合わせて一晩の公演としている。いずれも悲劇的な愛を生きるヒロインたちだが、ギエム自ら演じるのは最初の『三人姉妹』のマーシャと、最後の『マルグリットとアルマン』の女性タイトルロールである。

マクミラン振付の『三人姉妹』は、止まることなく連なる流動的な動きの中に微妙な心理の綾が織り込まれているのが見どころ。特にすばらしいのが、堅物で退屈な高校教師を夫に持つ次女が、胸の奥底に抑え込んだ不倫の情熱を突如ほとばしるように溢れさせる瞬間だ。パートナーが彼女を頭上に投げ上げるや、ギエムは空に向かって羽ばたくような姿で回転した。テクニツクの凄さよりも、幻のように描き出されたマーシャの心の叫びに胸を衝かれた。

最後の『マルグリットとアルマン』はアシュトンがフオンテーンとヌレエフのために振り付けたバレエで、この二人の後、上演が絶えていたのを今回ギエムが取り上げた。病み衰えたヒロインという設定自体、ギエムというバレリーナのイメージからは最も遠いところにあるように思われたが、しかし極限の悲しみを表現しうるのは、技術的に

[59] ギエムの三つの愛の物語

～強靱にして繊細～

2003年6月7日 東京新聞 夕刊

も内面的にも強い芸術しかないのだということ
あらためて認識させた。

衰弱したマルグリットがアルマンに抱えられ、
上半身は力萎えたまま、長い両足をそよがせる。
テクニクとして見れば驚くべき強靱さを必要と
する動きなのだが、見た目にはまるで風に揺れる
木の葉、いや微かな吐息のように見える。何のた
めのテクニクか、思い知らされる舞台だった。

ギエムのパートナーとして四人のスターが日替
わりで出演するので、その比較が後日の話題にな
りそうだ。またかつて輝くばかりの王子を踊った
アンソニー・ダウエルが、マーシャの愚直な夫、
ついでアルマンの父という渋い役でいぶし銀の存
在感を見せたのも感銘が深い。

(5月31日、神奈川県民ホール)